雪いろのペガサス

儀府成一＝作
中島保彦＝え

雪いろのペガサス

儀府成一＝作
中島保彦＝え

理論社刊／JUNIOR LIBRARY

913／雪いろのペガサス
儀府成一（ぎふ・せいいち）
理論社／1974年初版
246p／23cm／菊判
コード＝8393-31344-8924

雪いろのペガサス
一九七五年六月　第三刷©

作　者　儀府成一
画　家　中島保彦
制　作　小宮山量平
発行者　小畑光弘
発行所　株式会社　理論社
東京都新宿区若松町一〇四番地
電話（203）五七九一〔代表〕
振替　東京九五七三六番

はじめに

幼少時、ひとはみな多くの夢と可能性をもった、ファンタジックな抒情詩人だ。鷲沢春男は詩は書かなかったが、何百枚かかぞえきれない翼をもった〝雪いろのペガサス〟がしばしばやってきて彼をのせ、空間異空間を自由自在に飛翔した。

ペガサスはお金では買えないし、春男の家の馬屋には馬さえいなかったのに、「世のため馬のため」に、前代未聞の馬のホテルを開業したのだから、おどろきだ。これはすべて貧しさがもたらしてくれたものなのだろうか。

貧乏とは、なんと貴重なものなのか。仲間よ、きみたちもここに来て馬を飼ったり、快適なペガサスにまたがったりするがいい。やがての日、そういうものときれいさっぱりと訣別するために、も。

はじめに／1

1 春男のポスター 5

2 名物〈かめどこ〉 12

3 すてきなとうふと旅の画家 18

4 とうふ食いの王様 29

5 ゲップラさいばん 40

6 耳郎平叔父の手紙 51

7 ゴロル・ハートム 63

8 山菜のはなし 66

9 ゆいこ 71

10 「どぜう」と「てふてふ」 79

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

11 春男のペガサス 87
12 馬屋の研究 100
13 「マシ」と「オイノ」 113
14 春男のエクボ 126
15 マゲの上で 132
16 ホテルはできた客が来た 144
17 最初の利益 156
18 馬の湯治客 168
19 事件 195
20 ペガサスの終点 222
あとがき／241

そうてい・さしえ

中島保彦

1　春男のポスター

ねえ、〈タブロイド判〉て、知ってる？　しらない。そうか、そういや、いかにも、なあんにも知らないような、ぼやんとした顔、しているよ。

タブロイド判てのは、ほら、まいにち配達される新聞紙、あれの1/2ページの大きさ、だと思えばいい。判てのは、A5だとか、B6だとか、新書判、なんて本の、紙の寸法のことなんだよ。いいかい。

あの、ほおっぺたのあたりが円こくて、どっか、ポパイにててさ。すぐ、ニコーンと笑う春男ンポーったら、そのタブロイド判四ページぶんの画用紙を横につないで、クレヨンで、思いっきりでっかく、馬のかおを、かいたんだよ。むろん、ふさふさしたタテガミも、とんがった耳も、トランプのスペードみたいな目も、べらぼうに長い、スキーでもやれそうな、ひたいからアゴへかけての空地も、それから、赤くって黒くって、奥のほうに、何だかエレキでもかくしていそうな、あの鼻のあなも、だよ。そうして、その絵の下に、

うまのホテル

って、よこ書きに、字を六こ、六色のクレヨンでもって、でかでかーッとならべたもんだ。

――ルテホのまう……

あ、だめェ。そんな、右から読んじゃア、だめだったら！　これ、旅館のポスターなんだよ。もちろん馬ので、左から読んでくれなくっちゃなあ。

そいつをさ、おらあの村の、おらあの仲間の鶯沢春男ったら、温泉ばの入りぐちの、バス通りに向いた、だあれの目にもつきやすい、自分ちの、いちばん高いところに、はりだしたもんだ。これじゃ目の見えない人か、あきめくらでないかぎり、たれだって、見ないですますわけにはいかないやね。

どっちかったら、ぼんやり型で、ひっこみ思案の春男ンポーが、こんなすげえポスターなんかかいて、あんなところにはり出すまでには、そりゃあとっても考えたし、ひとりでずいぶんまよったねえ。

なにしろここは、名もない山ンなかの、かわいそうなくらいチィセェふるうい温泉ば、なんだぜ。

こういう思いきったことをするのには、おとなだって子どもだって、とっても勇気がいるはずだ。
湯の湧き口から上流は、水がつめたすぎるせいか、ハヤも、カジカも、ウナギも、ナマズも、鯉も、アユも、一ぴきもいない川。いるのは、イワナばっかりという一本の、ほそくってはやくって、立っているような谷川をはさんで、家がたった八けんコッキリ、という温泉ばだ。
お湯かい？　お湯はどんどんわいてるさ。塩類泉ていうのかな、色がぜんぜんないんだよ。うちみ、中風、きりきず、ひふ病に、きくって評判さ。ほかに、あかんぼうが生まれるのにきく湯だっていうけど、どんなふうにきくんだか、おらたちにはマルキリわかんない。
おらたちはずっとチィセェとき、げりをしたり、かぜをひいたりすると、ばあさまなんかから、「ほれ、くすりっコのめや」なんて、のまされたもんだったが、いま考えると、どうやらこの湧き口から汲んだ湯のさましたやつさ。ひでェもんだ。ペッ！　ペッ！
温泉ばだの、旅館だのといったって、よその県の、でっかいの、デラックスなのにくらべたら、とっても話しにならないにきまってるさ。宿屋の屋根はかやぶきだし（その屋根のうえにはダタズキだの、鬼ユリの花だのが咲いている）、客室は、谷間の分教場のグランドみたいに、のっぺらぼうの大広間だったのを、むりをしてシキイを入れて、そまつなフスマでいくつもの部屋に仕切ったり、風通しも日あたりも考えないで、あとから建てました部屋が多いから、カギもかからないし、すきまだらけだ。
床はゆがんでいて、あるけばぐらぐらゆれるし、窓が少ししかないから、ひるでもうす暗くって、さむいくらいしいんとしている。だから、奥の部屋なんかに通されると、頭のてっぺんだけ円く剃

りのこして、長いひものついた赤いハッピをきて、白たびをはき、刀をさし、つめたーい手をした座敷童子が、トントントンとおどりだして、しらんふりをして、あそびの輪のなかに、まぎれこんでいるような気がしてしかたがない……

（――おらが寝ていてうなされるのは、この座敷ぼっこに、ふところへ、つめたーい手ッこを、べローッとつっこまれるからだ。でも、そのことはだれにもいえない……かなしくって、こわくって、何だか取りかえしがつかないことになってしまいそうで、やっぱり秘密にしておかなければ――）

でも、ほんとうはのんきなもんさ。フスマだの障子だのをあけはなしておけば、蝶だの、やんまだの、セミだのまで、いくらでも飛びこんで、裏のほうへ、樋で水を引いている裏口へとびぬける。天気のよい日はキツツキが、縁側のふとい柱にやってきて、コーン、ココン……とたたいて虫をさがす、というしまつさ。

浴場には、戦後のいまでも、木のワクがはまってるところもあるし、じきこの間までは、共同浴場の男湯と女湯とのさかいに、仕切板が立てられて、その上に吊りランプがたった一つ、ぼんやりとついてたくらい――川っぷちの野天風呂には、電灯もなかったんだよ。

なにしろここは、郡ざかいのどんづまりの山ン中だから、どっちを向いても山ばかり、鼻が山にぶつかりそうだあ。

雨がふりつづくと川があふれて、浴場のなかまでどんどん水がはいり、湯をうすめてしまい、水がすっかり退いてしまうまで、何日も湯にはいれなくしてしまう。こういうときにぶつかったお客さんは、湯治にきたんだか、洪水を見物にきたんだかわからないから、気のどくさ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そのかわり、そんなときは、茶いろっぽい洪水におし流されて、四十センチもある大きなイワナが、何十ぴきも浴場じゅうをおよぎまわったり、カワウソまで浴場にはいあがるので、イワナとりとカワウソ狩りで、たいくつどころか、温泉じゅうお祭りさわぎさ。だからお客さんのなかには、おとなしく湯につかるよりも、こっちのほうをおもしろがって、雨のふるのと洪水になるのを、待ちどおしがる人も昔はいたんだってな。

どうだい、おもしろそうだろう。こんなゆかいな温泉なんて、そうめったにあるもんじゃないよねえ。きみたちは、なんぼなんだって……という目つきをしてるけど、ま、うそだと思ったら、おらたちの温泉にやってきて、山だの、あたりの景色だの、ふるぼけた宿屋だのを見て、谷川のながれの音をきいてごらん。こんな話があっても、ちっともふしぎじゃない。あるとすればきっとここだ、ここ以外じゃない。あしたあたり、すこし強い雨がふらないかなあ、なんて気がしてくるから。

そのせいかどうか知らないが、このごろは遠くの町だの、海岸だの、あちこちの県からまで、「ひなびたところが、とっても気にいった」とか、「こんな安あがりの湯治ばは、いまどきどこにもない」とか、「ここへくるとのォんびりして、たしかに寿命がのびるようだ」なんていって、お客さんが、どんどんくるようになったんだ。

むかしから、〈湯組八けん〉と呼ばれてきた八けんのうち、三げんは、対山閣、滝見荘、小峰旅館という旅館で、あとは床屋と、とうふ屋兼雑貨屋、おそば屋兼料理屋が一けんずつ。のこりの二けんは、なんてったらいいのかな、百姓もやるけれど、けっしてそれだけじゃ食えないから、春から秋へかけては、川ざかなやどじょうをとったり、山菜をとったりする。冬になると炭を焼いた

り、木杓子をつくったり、また泊りがけで熊狩りにでかけたりするマタギ（猟師）でもある家――これが、春男ンポーのとこだよ。

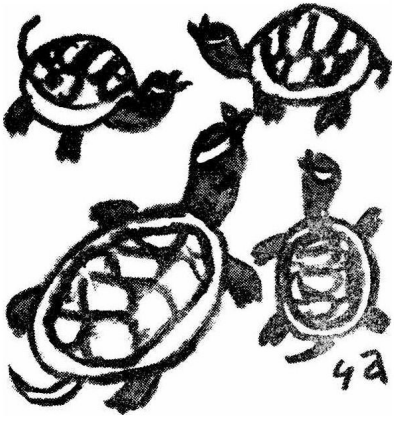
おしまいは、おらあのうちさ。やっぱりただの百姓だけど、代々、山の番人みたいなこともしてるし、ずっと前、じいさまは分教場の先生……じゃない、小使いをやってた。そのむすこ、つまり、おらあのおどうさは、もう三十年ちかくも村の役場につとめてるし、その弟の耳郎平――おらあの叔父さんは東京にいて、どっかの工場のようなところで働きながら、詩をつくってる。いつまでたってもお金にもならなければ、有名にもならない詩人……ま、こんなふうな家柄だよ。

〈イナリ〉って屋号でとおってるけど、これは爺さまが、チョンマゲを結ったまま、分教場の先生……（よく間違えるねえ）小使いをやったせいじゃない。昔、やしきのうちに、内神さまとして、稲荷さんを祀ってたが、いつのまにかその稲荷さんは、この部

落のうぶすなさまになった、というから、たぶん、そんな名残りかなんだろう。

むろん、こんなふうにわけてみても、どの旅館でも、ちゃんとたんぼも畑ももっている。じぶんちの山も、たいがいもっている。季節になると、山すその傾斜のつよいやせた畝に、豆やゴマもまくし、川っぷちのたんぼで、田うえもする。そまつな物置小屋をのぞいてみると、くわ、鎌はもとより、モッコ、唐箕、千歯扱き、でっかい木のウス、みそをつくるとき使う舟、Tの字のおばけみたいなエンブリ、そしてカンジキのはてまであって、汗と手あかでピカピカしている。こうして、もう何代も何代も前から、百姓もやれば、宿屋もやってきたってわけさ。

これが、おらあの村だ。世界にたった一つしかない、おらあの村だ。「あそこはツンブ（田にし）みたいだ。ツンブの親方ぐらいしかない」なんて、田にしにたとえられるくらいチィセェけれど、いい村だよ。



2　名物〈かめどこ〉

これで、ざっと村の紹介はすんだ。それではこんどは、村の人たちの話をしようか。まず、イの一ばんは〈かめどこ〉だ。

〈かめどこ〉といったって、べつに、亀を飼ってるってわけじゃない。ただ、そこのおどうさの名が八巻亀左衛門で、おがさは、カメヨ。そしてむすこが3人あって、うえから亀之助、亀十郎、亀松と、みんな亀の字がついてるもんだから、一カ所に親子の亀があつまって、はちまきをしめて、ウンウンうなってるみたい……なんとなく、そんな感じがするだろう。そうなると、職業は床屋だし、〈かめどこ〉は、ぴったりのニック・ネームだってことになるよなあ。

おらたちははじめ亀之助のことを、カメ、カメって略してよんでたんだ。だけど、下のふたりの弟、亀十郎と亀松とが、あそびの仲間にはいったり、学校にあがったりするようになってからは、カメだけでは、どのカメだかごちゃごちゃして、わかンなくなったから、おらたちは、兄きの亀之助から亀をとっちゃって、ただの〈ノスケ〉にしてやった。

ノスケ――ちょっと、いかすじゃない？

ノスケは、いまでもノスケだし、いつまでも、ノスケでいるほうがいいと思う。〈亀やん〉〈亀くん〉、ああ、どっちもいやだよ。俗っぽくって、ありふれてて。ノスケは、なぜノスケなのか、

わかんないことにしておいたほうが、何となくたのしいようにおらは思う。
じっさい、ノスケの顔をじいっとみていると、これはやっぱり、八巻亀之助なんてもンじゃない、どうしてもノスケだ。ノスケ以外のだれでもない、生まれる前からのノスケ、ほんもののノスケはこいつだようって、大きな声で、ふれてやりたいような気がしてくるんだもん。いいあだ名ってもンは、なんかしらふわっとしたところがあって、何ともいえない乙なあじだよなあ。
ノスケときたら、すこしどもりだし、木のぼりなんかへたくそだけれど、気まえがよくって、木の根っこみたいな、どっしりとしたからだをしてら。
でも、〈かめどこ〉のおやじさんが、お酒によっぱらって、赤くなって、ふざけるつもりらしくふらふらして、ナニワブシなんかうなってたら、ぜったい、髪を刈ってもらいになんか、いかないほうがいい。そんなときつかまったら、あぶないからね。
あんなにうるさかった、カッコウだの、山バトだの、トドだののなき声があらかたおしまいになって、野にも山にもまっしろい百合の花がまっさかりのいつかの夏、とおくの町からわざわざ湯治にやってきたお客さんのひとりが、なんにも知らないでこの〈かめどこ〉へ出かけていき、眉毛の片ほうを、ステーンと剃りおとされてね、おおさわぎをしたことがあるんだよ。
「き、きみ。きみはぼくに対して、なにかうらみでもあるのか。これじゃア白秋の〈あわて床屋〉どころじゃ、ないじゃないか。おれは兎なもんか、ひどいも何も、じょうだんにもほどがある！」
お客さんは、あまりのことに青くなり、それからまっかになって、床屋にくってかかったね。
駅から、この温泉ばまでくる途中、ひろい野原をよこぎったり、うすぐらい沢や林のなかにはい

ったり、峠をこえたりするとき、狐にだまされたとか、旅館の共同炊事ばで、食事のしたくをしながら、いろりにころげ落ちて、やけどをしたとかなら、まだあきらめもつくし、弁解もできる。

まっぴるま、まだ四十まえの大の男が、床屋へ散髪にいって、理由もないのに、こんなひどい目にあわされたといっても、だれも、ほんとのこととは思っちゃくれないだろう。何をやったか知らないが、とにかく、よっぽど悪いことをしたため、みんなによってたかって、しばり上げられるかどうかして、罰として、あんなひどいことをされたんだろう……ぐらいにしか、世間ではとっちゃくれないにちがいない。

耳が二つ、目も二つ、はなのあなまでちゃんと二つありながら、眉毛だけ一本しかないなんて、これじゃまるでカタワだ。できそこないだ。見たこともない間抜けづらだ。怪獣だ。ステーンのテーンだ。こんなみっともない顔にされちまっちゃ、ていさいがわるくって、予定どおり今日山をおりて、町のわが家にかえるどころか、浴場へひとふろあびにおりてもいけないと、お客さんはぼやくんだよ。

「おい床屋、おまえはたいした床屋だよ。こんなふらちなまねなんか、ふつうの床屋なら、できることでもやることでもない。おまえはたぶん、世界一の名人気どりなんだろうが、さあよいか、ワン、ツー、スリー、おれが三つかぞえるうちに、その世界一の腕でもって、おれにだ、おれの顔を、おれのもとの顔にして、眉毛をつけて、おれにかえしてよこすんだ。わかったな」

お客さんは、とうとう頭にきたらしい。おれが何人いるんだか、わかンないくらいジャカスカくり返して、無茶な注文も無茶とも思わないで、〈かめどこ〉をどなりつけ、何度もつかみかかりそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com